

ラフカディオ・ハーンのニューオリンズ時代における
日本との出会い

—「日本の詩瞥見」をめぐって—

中 島 淑 恵

富山大学人文学部紀要第 67 号抜刷

2017年8月

ラフカディオ・ハーンのニューオーリンズ時代における 日本との出会い

—「日本の詩瞥見」をめぐって—

中 島 淑 恵

はじめに

ラフカディオ・ハーンが日本に興味を抱いたのは、1884年にニューオーリンズで開催された万国博覧会で日本の様々な文物に触れ、また農商務省の服部一三と出会ってそれらの文物の説明を受けことがきっかけであると一般に言われている。しかし、ニューオーリンズ時代のハーンは、それよりも1年も前に発表されたコラム「日本の詩瞥見 (A Peep at Japanese poetry)」¹⁾において、「日本の詩」すなわち和歌についての並々ならぬ知見を披露している。この時期のハーンは確かに、のちにモデルによって取りまとめられた『東西文学評論 (Essays in European and Oriental Literature)』²⁾の目次を見ればわかるように、世界各地の民話や伝承に興味を抱いていたのであって、日本をとりわけ特別な国と認識していたとは言い難いかも知れない。実際、『東西文学評論』にまとめられたアジアに関するコラムは、仏教の紹介からインドの女流による詩、中国人の信仰と並んでこの「日本の詩瞥見」が収められているのであって、アジアをざっと俯瞰したような布置になっているのは確かである。しかし、ヘルン文庫に収められた、このコラムを執筆する種本になったと思われるレオン・ド・ロニーの『日本詞華集 (Anthologie japonaise)』³⁾を精査すると、おそらくこのコラムの発表された1883年頃に、ハーンの中で日本という国が、アジア諸国の「ワン・オブ・ゼム」から、何か特別な位置を占める唯一の国に変貌を遂げたのではないかとと思われる点が見受けられる。すなわち、実際の日本や日本人と対峙する前に、ハーンは書物によってすでに「日本」なるものに深い関心を寄せていたのではないかとすることが十分に推察されるのである。

またモデルは、1923年に『東西文学評論』を編纂するにあたって、グールドがその著作⁴⁾の中でリストに挙げなかった1882年から1884年までの『タイムズ・デモクラット』紙に収められた無署名のコラムをハーンのものとして収録しており、「日本の詩瞥見」もその一つである。これら無署名のコラムをどのようにしてハーンの筆になるものと同定できるのかについて、実は客観的な根拠はないに等しい。またモデルは序文の中で、「グールドの著作にないタイトルで私が選んだコラムは、ハーンによるものであることに些かの疑いの痕跡もないものである (The editorials I chose, whose titles do not appear in Gould's book are those of which there is not

the least vestige of doubt that they are Hearn's)」⁵⁾と述べているが、その理由は「同紙の他の誰も、東洋の事柄についてこれほど親しんだ者はいないし、フランスのロマン派に熱情を抱く者もいなかった (No one else on the paper was as familiar with Oriental topics or had such a passion for the French romantics)」⁶⁾というものであり、これに続く例示はロチなどフランスの作家についてのもので、「日本」を題材にした「日本の詩瞥見」が、なぜ「疑いの余地なく」ハーンの筆になるものと断定できるのかについては何も述べていない。しかし、ヘルン文庫に収められたロニーの『日本詞華集』の精査によって、やはりこのコラムがハーンの筆になるものとある程度確定できる根拠となるものが見つかったようにも思われるのである。

以下小論は、このような見地からロニーの『日本詞華集』を中心に、1883年頃のハーンの日本に関する関心のありようを観察することによって、「日本の詩瞥見」をその後のハーンの日本関連の著作との関連から読み直そうとするものであり、この無署名のコラムがハーンの筆になるものと確定し得る根拠の一端を示そうとするものでもある。

1. アメリカ時代に購入した日本関連の図書

ヘルン文庫の目録である『富山大学附属図書館所蔵ヘルン（小泉八雲）文庫目録改訂版』によれば、リストに*印が付けられている書物はハーンがアメリカで入手し、来日時にアメリカに置いてきた（その大半はグールドの手元に託された）書物であり、ハーンの死後小泉家に返されたものであるという⁷⁾。すなわちこれらの書物は、ハーンのアメリカ時代の関心のありようを知る上で重要な手掛かりとなるものであり、来日後教師となり経済的に余裕も出てから買い揃えた蔵書とは質的に異なるものなのではないかと思われる。

日本に関連する書物についても、来日後のハーンは確かに、横浜に到着するや否やチェンバレン訳の『古事記』を入手しているほか、数多くの日本に関する書物を収集している。一方、ヘルン文庫に収められた書物のうち、ハーンがアメリカ時代に購入したものは、以下の通りであり、数の上では多いとは言えないものであるが、極めて興味深い構成を呈していることが分かる。

まず、英語で書かれた書物は以下の2冊のみである。

- ① 書架番号 [956] Griffis, William Elliot, *Japanese fairy world : studies from the Wonder-Lore of Japan*, Schenectady, N. Y. 1880.
- ② 書架番号 [967] Lanman, Charles, *Leading men of Japan: with an historical summary of the Empire*, Boston, D. Lothrop, 1883.

これに対してフランス語で書かれたものは以下の通り、7冊を数えることが分かった。

- ① 書架番号 [1971] Actes de la société philologique, Tome 4, N. 7 Juillet 1874, Paris. *Mythologie et légendes et Esquimaux du Groenland. La mythologie des Japonais : d'après le Koku-si-ryakus*, par Emile Buranouf.
- ② 書架番号 [2007] Léon de Rosny, *La civilisation japonaise : conférence, faites à l'école spéciale des langues orientales*, Paris, Ernest Leroux, 1883.
- ③ 書架番号 [2008] Léon de Rosny, *Les peuples orientaux : connus des anciens Chinois*, Paris, Ernest Leroux, 1883.
- ④ 書架番号 [2026] Hir et Ranjhan, *Légende du Penjab* traduite par M. Benjamin Duprat, 1863. *Mythologie japonaise*, par P. Mounichou, Paris, Benjamin Duprat, 1863.
- ⑤ 書架番号 [2028] Léon de Rosny, *Anthologie japonaise, poésie anciennes et modernes*, Paris, Maisonneuve, 1871.
- ⑥ 書架番号 [2030] Léon de Rosny, *Traité de l'éducation des vers à soie au Japon*, Paris, Maisonneuve, 1868.
- ⑦ 書架番号 [2035] Turrentini, Francois, *Tami-no-nigivai, l'activité humaine-contes moraux*, Paris, Maisonneuve, 1871.

英語で書かれた書物のうち①書架番号 [967] のものは、歴史上の人物から同時代に至る日本の偉人を紹介したもので、ハーンが関心を示していた神話やおとぎ話とは一線を画するものであり、「日本の詩瞥見」を著すために直接参照したようには思われ⁸⁾ない。これに対して②書架番号 [956] のものは、ハーンに関心に沿うものだったようで、同書 65 頁には、興味深い書き込みがある⁹⁾。これに比べてフランス語で書かれた書物の大半は、日本の神話、伝承あるいは詩歌に関連するものであり、民俗学に関する文献がそうであったように、ニューオーリンズ時代のハーンは、日本に関する知識もやはり、もっぱらフランス語文献から得ていたという事実が浮かび上がって来る。とりわけ同時代のフランスの東洋学者レオン・ド・ロニーには深く傾倒していたようで、上に挙げた日本関連の書物の他にも、ロニーの著書はこの時代にハーンは網羅的に購入していたようである。

この中でコラム「日本の詩瞥見」を書くにあたって主に参考にしたと考えられるものは、やはり⑤書架番号 [2028] の、レオン・ド・ロニーの『日本詞華集』である。以下、「日本の詩瞥見」を『日本詞華集』と対比させながら再読することにした。

2. 「日本の詩瞥見」と『日本詞華集』

「日本の詩瞥見」では、「アリア民族とモンゴル民族あるいは日本民族との間には、惑星間に横たわる青い空間よりも広大な深淵があるかのよう¹⁰⁾に常に思われてきた (between the Aryan

and Mongolian or Japanese races there had always appeared to exist an abyss vast as the blue interspaces between planet and planet)」時代とは異なり、西洋人と東洋人の間にもはや優劣は付けられないことを述べたうえで、「人情はどこ土地においても同じものであるように思える (human affection appears to be the same in all lands)」と論を進めている¹⁰⁾。そのうえで執筆者は中国と日本を対比させ、「日本のポピュラーな文学は、はるかに西洋の感覚に親しむもの (the popular literature of Japan harmonize more intimately with Occidental feeling)」であるとし、「多くの点において日本人は中華王国の人々よりもより我々に似ている (The Japanese people more resemble us in many things than do the people of the Middle Kingdom)」と見做している¹¹⁾。そして、「偉大なる英国詩人たちのこの上なき優美なあるいは鮮明な空想の多くが、すでに日本人の書き手によって先取りされている (many of the daintiest and brightest fancies of the great English poets have been anticipated by Japanese writers)」¹²⁾とまで述べたうえで、日本の詩集である『詩歌撰葉』¹³⁾の紹介を始めている。

以下『詩歌撰葉』の説明はその外観から始められるが、その視覚表現と色彩に満ちた体裁の描写はいかにもハーンらしいものでもあるがここではその精査は割愛し、詩の内容について触れた部分に注目して分析を行うことにする。このコラムの執筆者は、この詩集に収められているのは、「茶屋に住む女から帝の皇女あるいは寵姫に至るまでのあらゆる身分の女性によってその大半が書かれた (mostly written by Japanese women of all stations, from the denizens of tea-houses even to princess and favorites of emperors)」¹⁴⁾詩なのであるとしている。もちろんこれは事実ではなく、実際の『詩歌撰葉』には男性の詠んだものも多く含まれているが、このコラムには全体に、日本の詩を「女性」の筆になるものとして紹介したいという意図が込められているように思われる。

ところでこのようにこのコラムは、いかにも日本語で書かれた『詩歌撰葉』に基づいて紹介が行われるように思わせながら、実はその根拠がロニーの『日本詞華集』であることを、書名やロニーの名は挙げずにそれとなく読者に告げている。執筆者は詩の引用に入る前に、「このことは東洋学者にとっては新奇なことではない、すなわち (同書は) 10年ばかり前に賞賛すべき仏訳を付されてパリで復刻されているからである (It is not new to Oriental scholars, - having been reprinted in Paris with an admirable French translation, some ten years ago)」¹⁵⁾と述べているのである。

以下、同書から12篇の「詩」¹⁶⁾が紹介されている。紹介されている詩は、執筆者の意に沿うものを選んだようであり、紹介される順番もロニーの『日本詞華集』とは異なっている。ロニーの著作では、まず仮名書きで詩が引用され、次に発音を示すべくアルファベットによる音写が続き、さらに詩の仏語訳が付されるという体裁をとっているが、コラムでは詩の英語のみが紹介されている。以下引用されている詩についてその対比を確認するため、左欄にコラムの

英語、右欄にロニーの仏語を示しておきたい。

最初に紹介されているのは、夫君たる天智天皇の死を悼むのちの持統天皇による歌「八隅知しわが大王の夕されば…」であり、万葉集からの引用である。

O my great lord, master of the world, each evening thou wouldst turn thine eyes towards the reddening foliage of the trees upon the Hill of Spirits. Even today, were thou still living, thine eyes would be seeking them again; tomorrow thou wouldst contemplate them once more.

“So when evening comes, I also turn mine eyes toward the hill, and I am filled with grief. When I find myself alone at daybreak, the rough sleeve of my robe, moistened with tears, has not had time to become dry.¹⁶⁾

英語と仏語を対比してみれば分かるように、仏語の下線部分が英語では省略されていることが分かる。これはおそらく冗長であるために省略されたのであろうと思われる。また、二重下線の部分は、英語では必ずしも意を尽くして訳されていない部分であり、仏語にある強調の効果が英語では減じられていることがわかる。また、仏語で数か所使用されている説明的な括弧書きが英語ではなくなり、より簡潔な表現がコラムとして目指されていることが分かる。しかし、これらの相違点を除けば両者はよく似通っているのであって、英語が原文を参照したものではなく、仏語訳からの翻訳であることは明らかであろう。

この詩の紹介に続く「あら衣とは喪服の意である (The rough robe is the mourning apparel)」という指摘が何に由来するのかは不明であるが、次に紹介される詩も喪服にまつわるものなので、その関連から判断したものであろうと思われる。これについても英語と仏語を対比させて確認しておきたい。

Since customs hath limited the time of mourning, my mourning garments must be laid aside, but my tears alas! never can be laid aside.¹⁸⁾

O mon grand seigneur, maître du monde, le soir tu tournais tes regards vers les arbres aux feuilles rougissantes de la colline des Esprits, et, dès le point du jour, tu les cherchais des yeux. Aujourd’hui, (si tu vivais), tes yeux les cherchaient encore, demain tu les contemplerai encore !

(A mon tour) lorsque le soir arrive, je lève les yeux vers cette colline, et je suis remplie de tristesse. Solitaire, au point du jour, la manche de ma robe grossière (qu’ont mouillée mes larmes) n’a pas pu sécher un seul instant.¹⁷⁾

Puisque l’usage qu deuil veut qu’on fixe des bornes, mes funèbres habits me quittent aujourd’hui ; mais mes larmes, du moins, ne me quitteront pas.¹⁹⁾

大意として両者の意味するところは同じであると言えるが、細かな効果の点では、仏語が基本的に単純未来時制におかれ断定がやわらげられているのに対して、英語では「*must be*」や「*never can be*」などの強い表現によって、強い断言の効果を生み出しているなど、若干の意図的な改変があるように思われる点がある。この点は、このコラムにおいてこの詩が、女流詩人によるものとされていることと通底するものであるように思われる。すなわちコラムでは、これら一連の詩が、夫の死を悼む妻のそれとして提示されているからである。もちろんロニーの著書では、この詩は、史実通り、正暦3年（西暦995年）に父である太政大臣藤原為光の死を悼んで藤原道信が読んだものであることが説明されている²⁰⁾。これらの詩を女流によるものとコラムが断じているのは、コラム全体に架空の物語性をまとわせようとしている執筆者の意図なのであろう。これに続けて同じく女性が恋人を形容した歌が紹介されている。

… “Wert thou a jewel, I would wear thee in my bracelet; - Wert thou a garment, never would I find time to undress me.”²¹⁾ Si tu étais pierre précieuse, je te porterais en bracelet ; si tu étais vêtement, je ne trouverais pas le temps de me déshabiller.²²⁾

これは確かに万葉集で、逸名の女性が読んだものとされ、仏語では帝の死に際してとある女性によって詠まれたものとして全文が紹介されているが、英語ではその一部だけが引用されて紹介されたものであり、崩御した帝への恋情などの文脈とは独立して、恋する女の気持ちを詠った部分のみを引用することによって、「日本人の間の恋愛詩は、その純粹さと簡素な美しさにおいて他のいかなる民族の詩をも凌駕するものである（The poetry of affection among the Japanese is not surpassed in purity and simple beauty by that of any other people）」²³⁾ ことを示そうとしているのかも知れない。

これに続いて2篇の「魅力的で素朴な詩（*charming naif verses*）」²⁴⁾ が紹介されている。

« What though I seek to hide my passion; every feature betrays my love.
So that each one asks me of what I am thinking.”²⁵⁾ Quoique je m’efforce de cacher ma passion, à tous mes traits se trahit mon amour,
Au point que chacun me demande à quoi je pense…²⁶⁾

“To what can I compare the condition of my thoughts since I have known thee?”²⁷⁾ Si je compare que sont devenues mes pensées depuis que je t’ai connue,
Auparavant je n’avais point de pensées.²⁸⁾

この2首は短く分かりやすい内容であるためか、英語と仏語で大きな違いはない。また、ロニーの著書でも両者はこの順番で見開きの2頁でいわば対になって紹介されているように、コラムでも同じような恋情を物語るものとして連続して紹介されている。しかし、両者の大きな違いとして、コラムではこれら2篇の詩を、「女性の恋の芽ぐみの時のたくまざる表現 (the artless expressions of women's love in its budding)」²⁹⁾と事実と反して形容しているのに対して、ロニーの著書ではこれらの詩の作者を名前まで挙げて紹介していることが挙げられる。すなわち前者は平兼盛、後者は藤原敦忠の作であり、当然のことながらいずれも男性である。コラムではやはり、これまで紹介してきた詩を、女性の筆になるものとして一つの物語に集約させようとする意図が働いているように思われるのである。

続けて引用されている詩は、確かに二篇とも女性の筆になるものである。前者は伊勢、後者は待賢門院堀河によるもので、そのことはロニーの著書では触れられている。コラムでは、この二つの詩は、先に引用された二つの詩が「芽ぐみの時」のいわば少女の情感を詠っているのに対して、「開いた花そのもの (the blossom iteself)」³⁰⁾であるとして、成熟した女の情感を物語っているものとして示されている。以下にコラムの英語とロニー仏語を比較しておきたい。

まずは伊勢のものである。

… »Would it now be possible for me to pass one moment of my life without seeing thee though that moment were short as the intervals between the joints of reeds growing by the shores in Naniva?» ³¹⁾	Me seraut-il possible de passer sans le voir un moment de cette vie, fût-il aussi court que l'intervalle des nœuds des roseaux qui croissent sur les rivages de Naniva ? ³²⁾
--	---

これは、英語とフランス語の構文の違いによる差異の他は、大意は満たされているものといえるだろう。特に省略もなく、複数形や比喩も英語でもよく保たれているように見受けられる。

次に、コラムが「とてもかわいい感情 (a very pretty sentiment)」³³⁾とする待賢門院堀河の詩を確認しておく。

“I know not if his love will endure; but my thoughts, this morning, are not less tossed than my black hair.” ³⁴⁾	J'ignore si son amour sera durable, mais le <u>désordre</u> est, ce matin, dans mes pensées comme dans ma noire chevelure. ³⁵⁾
---	---

大意はいずれも相違ないが、仏語では下線部のように「混乱 (désordre)」という語が挿入されて説明的であるのに対して、英語ではこれにあたる語がないため、表現により隠喩的な効果もたらされているものと言える。

また、コラムではこの詩を、「アマルーやペルシアの詩人カーニーの一節に比せられるもの (has been compared with passages in Amarou and the Persian poet Kaani)」³⁶⁾として、「私の恋人の髪のようにすっきりもつれた一つの言葉、始まりも終わりもない一つの言葉が私の最も愛するもの」というカーニーの詩の一節を紹介しているが、これはロニーの著書の注に引用されているものを簡略化して英語としたものであるように思われる。以下に両者の対比を示しておく。

<p>a word, all in disorder, like the hair of my beloved, - a word without beginning or end, - is what I love most³⁷⁾</p>	<p>Une parole déordonnée, semblable à la chevelure des bien-aimés, est ce que j'aime le plus. – (Une parole) <u>semblable aux affaires de ce monde</u>, sans commencement ni fin, est ce que j'aime le plus.³⁸⁾</p>
---	--

一見して分かるように、ロニーの注の下線部はコラムでは省略されている。コラムという性格上なるべく簡潔に、冗長ではかのイメージを喚起しかねない要素を排除した結果なのではないかと考えられる。また、ロニーの注ではこれに先立ってペルシア語の原詩が紹介され、さらに出典も明記されているが、コラムではそれらは省略されている。結果的に、コラムの執筆者が自らの広汎な知識を披歴しているかのような印象を与える効果を生み出していることは否めないだろう。

いずれにしてもコラムの執筆者は、官能的なインドやペルシアの詩に対して、これら「日本の女の子の詩の極度の簡素さ (the extreme simplicity of the Japanese girl's verse)」が、「より心にしみる (more touching)」³⁹⁾ものだとしている。ここで執筆者が大人の女性ではなく「女の子 (girl)」という語を用いていることも、インドやペルシアの大人の官能詩との違いを際立たせるための方便として作用しているのではないだろうか。そして、この詩の紹介に続いて、このような「日本の恋人たち (Japanese sweethearts)」が、やがて「最良の妻や母 (the best of wives and mothers)」すなわち「勇敢な女性 (brave women)」となるとして、危急の時には「いかなる兵士にも勝る剣の使い手となって夫のために戦う (wield a sabre skillfully as any soldier, and fight for their husbands)」⁴⁰⁾のだとして次の詩を引用している。この詩もまた、ロニーの著作の仏語と対比させながら見ておくことにしたい。

<p>…” How sweet to pass away together, to die together, in this world of ours where the clock which strikes the Supreme hour, is almost always too fast for one, or too slow for other.”⁴¹⁾</p>	<p>Qu'il est doux de <u>s'éteindre et de mourir</u> ensemble, en ce monde où d'ordinaire l'horloge qui marque l'heure suprême <u>retarde pour l'un,</u> <u>tandis que pour l'autre elle avance.</u>⁴²⁾</p>
--	---

ここでも、大意にはおおむね差異がないが、フランス語では「力尽き死ぬ (de s'éteindre et de mourir)」と二つの動詞で段階的に示される死が、英語では「死ぬ (pass away)」という一つの動詞表現の熟語に縮約されている点と、フランス語では動詞表現で語られる末尾が、英語では形容詞としてより静的に示されている点が相違点であると言えよう。

それよりも重要な違いはその後の説明にあり、英語では「ナガハル」が砦の指揮官の妻の名として紹介されているが、フランス語では、この詩が別所小三郎長治の妻によって詠まれたものであると正しく紹介されている点である⁴³⁾。このことは、コラムの執筆者が日本人の名前について基本的な知識を持ち合わせていないことを示すと同時に、ロニーの著書からなるべく簡略な引用を試みた、いわばショートサーキットがこのような結果をもたらししていると考えられることもできよう。ともあれ、「夫の傍らで死んだ (died at her husband's side)」⁴⁴⁾ 妻の悲劇性がより簡潔に描写される結果となっているものといえる。

すなわち、ここまでに引用されて来た日本の詩は、すべて女性によって書かれたものとすることで、少女の観念的な恋から大人の女性の恋情、そして妻となった女性の夫を思う気持ちへと一連の物語をたどるような構造になっていることが分かる。紙幅の制約の大きい新聞のコラムにおいて最大限の効果を生み出そうと工夫した結果がこのような劇的な表現として表れているものといえるのではないだろうか。

次に紹介される詩もこのような女性の感興を詠ったものであるが、まずはコラムの英語とロニーの著書の仏語を対比させて見ておくことにしたい。

<p>"Separated from thee, - far from thee, - I gaze alone at the celestial vault... Ah! what delight were mine could the moon be transformed into a mirror!"⁴⁵⁾</p>	<p>Séparée, loin de toi, je contemple la voûte céleste. Qu'il serait charmant, pour moi, si la lune devenait un miroir !⁴⁶⁾</p>
---	--

この小さな詩も、ほぼ相違なく仏語から英語に置き換えられていることが分かる。たとえば「天空」という語が古語めいた英語で « the celestial vault » と訳されるのは、一般にハーンの英語の特徴であるとされるが、その元になったものがこのような仏語のテキストであると考えれば、仏語の趣をなるべく保存しようとする英語としては古語じみた表現になるということになるのであろう。

この詩には解説がついていて、詠み手の女性が、「自分たち二人を照らす「月」 (the moon which lights them both)」が鏡となって「彼女に不在の恋人の顔を映してくれるように (so as to reflect her absent lover's face for her)」⁴⁷⁾ 願っているのだとしているが、これもロニーの著作における仏語の説明をほぼそのまま英語に移し替えたものである⁴⁸⁾。

この詩の紹介に続いてコラムでは、和泉式部の歌の英語が引用されているが、これもまたロニーの著作の説明と軌を一にするものである。以下に該当箇所の英文とロニーの仏語による説明を対比させて示しておく。

<p>... Idzoumi-Shiki-bu, a lady-of-honor at Mikado's court, who even at the point of death composed a little poem, praying her lover to come that she might see him once more, « so as to bear the memory of his face into the other world beyond the grave.»⁴⁹⁾</p>	<p>L'auteur, <i>Idzumi-Shikibu</i>, sentant sa fin prochaine, l'envoya à son amant pour lui exprimer le désir de le revoir encore une fois avant de mourir.⁵⁰⁾</p>
---	---

両者の顕著な違いは、英語では恋人の「顔 (face)」と記憶すべき対象がより具体的に明記されているのに対して、フランス語にはそれが無いこと、末尾も、フランス語では「死ぬ前に (avant de mourir)」と簡潔に示されるのに対して英語では「墓の向こうの別の世界へ (into the other world beyond the grave)」とかなり具体的であると同時に説明的になっていることである。いずれにしても、「和泉式部」の音写の表記の方法から見ても、このコラムがロニーの著作を下敷きにしていることはもはや明白であると言えよう。

以下の三つの詩は男性を作者とするもので、ここまでの女性の恋情の発展とは別の種類の感興を詠ったものであるが、やはりロニーの著作に引用されているものである。日本の詩には女性による恋の詩ばかりではなく、様々な感興を詠った詩があることを最後に示そうとしたためかもしれない。以下に英語と仏語を対比させてみておく。

<p>"Though my palace be no longer the habitation of its master, forget not, O plumleaves. To bud forth each spring upon the edge of his roof." ⁵¹⁾</p>	<p>Bien que mon palais, depuis mon depart, soit inhabité par son maître, n'oubliez pas, fleurs de prunier, d'épanouir au printemps sur le bord de sa toiture.⁵²⁾</p>
---	---

この詩は英語とフランス語で特に大きな違いはなく、詩の大意を忠実に写し取っているものと思われる。

最後の二篇の詩は、とりわけハーンがこだわり続けた視覚表現にまつわるものであることが興味深い。

“The wild ducks flying through cloud mist seem to me like letters traced in flowing ink.”⁵³⁾ Les oies sauvages qui s’envolent dans la brume des nuages me paraissent semblables à des caractères tracés avec de l’encre limpide.⁵⁴⁾

この詩も英語と仏語で大きな違いはないものといえるが、仏語末尾の「清澄な (limpide)」という語が英語では「流れる (flowing)」に置き換えられている点がわずかな違いと言えるだろうか。

最後の詩も、おそらく当時ハーンが並々ならぬ関心を抱いていたはずの写真術に関するものであり、さらにそれがジョアキン・ミラーの詩の完全な翻訳だとコラムは述べているが、この対比はコラムの執筆者が行ったものであろう。この詩についてはロニーの著書の仏語ともほぼ同一のものであるとあってよいだろうが、念のために以下に対比を示しておく。

“A photograph is a painting by the Creator – Whose brush is Light!”⁵⁵⁾ La photographie est une peinture du Créateur, dont le pinceau est la lumière.⁵⁶⁾

このようにして12の日本の詩を引用した後で、コラムはこのような日本の詩が、東洋学者たちによって『ギリシア詞華集』に比せられてきたことは理由のないことではないと述べている。かくして執筆者は、「恋人のために月が鏡になってほしいと願った少女の願いは、プラトンの名高い『ギリシア詞華集』の数行に引けを取らぬほど美しい (The girl’s desire that the moon might become a mirror for her love’s sake is not less beautiful than those celebrated lines in the *Greek Anthology* by Plato)」⁵⁷⁾と称賛している。

さらにコラムの執筆者は、先に引用した和泉式部の詩を呼び起こして、「夫の顔の完全な記憶を持って亡霊の国に行くために最後にもう一度夫の顔を見たいという願いは確かに、恋を忘れないようにレーテ河の水を飲み干すことがないようにと願う古いギリシアの墓碑銘と同様に美しい (As the desire of the Japanese bride for a last look at her husband’s face, that she might carry a perfect memory of him into the world of shadows, is surely beautiful as the old Greel epitaph in which the beloved dead is desought not to quaff the waters of Lethe, lest she forget her love)」⁵⁸⁾と結論付けている。

こうして「日本の詩瞥見」は、日本の詩を古代ギリシアの詩に比肩しうるものとして対比させたところで終わっている。このことも、ギリシア人を母に持つハーンがこのコラムの執筆者であると考えれば、この時期のハーンの中で日本がすでにギリシアと分かちがたく結びついたことを示しているようで説得力のある対比であると言えるだろう

ところで、わが国ではこれまであまり指摘されてこなかったことのようにあるが、ロニーに

よって名付けられた『日本詞華集 (*Anthologie japonaise*)』という書名は、どう考えても『ギリシア詞華集 (フランス語では *Anthologie grecque*)』を意識して名付けられたものであると考えられる。このことについて実は著者であるロニー自身は何も語っておらず、むしろ、日本の詩歌には、西洋人が認識するところの「詩が全く欠如している (*la poésie faisait complètement défaut*)」⁵⁹⁾とさえ述べている。しかし、これに先立つ前書きで、同時期にコレージュ・ド・フランスの同僚であったと思われる法学者エドワール・ド・ラブレーが、「彼 (=ロニー) がこの詩集に『詞華集』という題名を付けたのは、いかにももっともなことと思われる。というのも、その短さによって、ここに収められた詩は、古代のエピグラムを想起させるからである。日本人は、ギリシア人がとくに卓越していたこの詩形に特段の好みを有していたようである (*Il a eu raison d'intituler son recueil Anthologie, car par leur brièveté elles rappellent les épigrammes antiques. Il semble que les Japonais aient un goût particulier pour ce genre où les Grecs ont excellé.*)」⁶⁰⁾と述べていることから分かるように、この題名は、少なくともフランスの同時代の知識人には、即座に『ギリシア詞華集』を想起させるものであったことは想像に難くない。そして「日本の詩瞥見」の執筆者も、この見解を共有するかのよう、「日本の詩人は数少ない簡素な単語を発するだけで、最奥の感情を喚起する稀にして美しい能力を有している (*the Japanese poet possesses the rare and beautiful power of arousing the deepest feeling by the utterance of a few simple words*)」⁶¹⁾と述べ、このような日本の詩を「短い韻文の至高の完璧さ (*the supreme perfection of epigrammatic verse*)」⁶²⁾を示すものであるとしている。

3. おわりに代えて—日本とギリシアをつなぐもの

かくして1883年発表のこのコラムによって、日本と古代ギリシアは短詩形文学によって分かちがたく結びつけられたのであるが、実はヘルン文庫蔵書のロニーの『日本詞華集』の裏見返しには、この事実を補強するものと思われる鉛筆による書き込みがわずかながら存在する。すなわち、同書の裏見返しの左頁は、鉛筆書きで縦に、52, 55, 57, 90 という算用数字の書き込みがあるが、これらの頁にはそれぞれ、「日本の詩瞥見」に引用され、小論でこれまでに見てきた、藤原道信の歌 (52 頁)、伊勢の歌 (55 頁)、待賢門院堀河の歌 (57 頁)、別所小三郎長治の歌 (90 頁)」が紹介されているのである。このことは、やはりこの無署名のコラムを書いたのがハーンであることの力強い傍証になるのではないだろうか。

また、同書裏見返しの右側には、ただ一つ、79の数字が鉛筆で書かれている。そして同書79頁には、百人一首に収められた後京極撰政前太政大臣の「きりぎりすなくやしもよのさむしろに…」の歌の引用と説明がある。この歌は、「日本の詩瞥見」では引用されていないが、ハーンの著作を熱心に読む者ならば、キリギリスがハーンにとってどれほど重要なものか、それが古代ギリシアとハーン自身を、そして日本をつなぐものとしてどれほどの意味を持つものであ

るかは容易に了解できるであろう⁶³⁾。この小さな昆虫が、古代ギリシアと日本をつなぐことによって、ハーンにとって日本は母なる国ギリシアと分かちがたく結びついたのでないだろうか。そのようないわば化学変化のようなものが、来日よりはるか前のニューオーリンズ時代にすでに起きていた、ということの証左として、同書の書き込みは機能し得ると言って差し支えないだろう。こうしてギリシアと日本との相同性についての思いは、この時期のハーンの中でますます募ってゆくように思われ、それがやがて日本渡航への夢へとつながって行ったものと考えられるのであり、それは日本という国がハーンにとって、アジア諸国の「ワン・オブ・ゼム」から、何物にも代えがたい唯一の国へと変貌していった軌跡を示しているものと考えられるのである。

注

- 1) 1883年5月27日付の『タイムズ・デモクラット (*Times-Democrat*)』紙、日曜版の文芸コラムとして無署名で掲載されたもの。小論では後出の Lafcadio Hearn, *Essays in European and Oriental Literature*, arranged and edited by Albert Mordell, New York, Dodd, Mead and Company, 1923 から引用を行った。また、訳出その他の書誌情報について、『ラフカディオ・ハーン著作集』第5巻、恒文社、1988年を参考にさせていただいたことを付記しておく。なお、以下「日本の詩瞥見」からの引用はタイトルを PJP とし、頁数のみを記す。
- 2) Lafcadio Hearn, *Essays in European and Oriental Literature*, arranged and edited by Albert Mordell, New York, Dodd, Mead and Company, 1923.
- 3) Léon de Rosny, *Anthologie japonaise, poésie anciennes et modernes*, Paris, Maisonneuve, 1871. なお、以下同書からの引用はタイトルを AJ とし、頁数のみを記す。
- 4) George M. Gould, *Concerning Lafcadio Hearn*, Philadelphia, George W. Jacobs & Company Publisher's, 1908. なお、グールドが同書でハーンのものとしてリストに挙げている『タイムズ・デモクラット』紙の記事は、1885年から1887年の間の日曜版の77篇の文芸コラムである。
- 5) PJP, p. xii.
- 6) PJP, p. xii.
- 7) ヘルン文庫の目録は、『富山大学附属図書館所蔵ヘルン（小泉八雲）文庫目録』改訂版、富山大学附属図書館、1999年によった。なお、同書冒頭 (p. viii) の編集ノートに、「ク、初版同様、ハーンの死後、アメリカのグールド氏から返された図書には「*」を書架番号の頭に付け、日本へ来てから収集したものは無印とした」とある。
- 8) しかし、この書物には何か所か鉛筆で書き込みがあり、とりわけ福沢諭吉の章には福沢の思想を端的に物語っている部分に傍線が引かれている。また、書き込みはないものの、後にハーンを東京帝国大学に招聘した外山正一の章もあり、ハーンが来日以前から外山の名を知っていた傍証として大変興味深いものである。
- 9) 65頁の桃太郎の物語を紹介した箇所、鬼の宝として「姿の見えなくなる帽子 (The hat which makes the one who puts it on invisible)」があるという記述の右余白に鉛筆で、「ギリシア神話『ハーデスの帽子』 (Greek mythology “cap of Hades”）」という書き込みがある。この書き込みから、ハーンがすでに日本の民話とギリシア神話の間に相同性を見出していたことを見て取ることができる。
- 10) PJP, p. 330.
- 11) PJP, p. 332.

- 12) PJP, p. 332.
- 13) ここでコラムの執筆者は、ロニーの冠したフランス語の『日本詞華集 (*Anthologie japonaise*)』というタイトルは用いず、Si-Ka-Zen-Yo とタイトルの音写のみを示している。
- 14) PJP, p. 333.
- 15) PJP, p. 333.
- 16) 日本の読者の中には、小論で「歌」ではなく「詩」という語を用いることに違和感を覚える向きもあるかもしれない。しかし、コラムの執筆者はあくまで「日本の詩」としてこれらを紹介しているのであり、また、必ずしも「和歌」の形式ではないものも含まれているので、以下「詩」という記述で通すことにしたい。
- 17) PJP, p. 333.
- 18) AJ, p. 16.
- 19) PJP, p. 334.
- 20) AJ, p. 52.
- 21) AJ, p. 52.
- 22) PJP, p. 334.
- 23) AJ, pp. 19-20.
- 24) PJP, p. 334.
- 25) PJP, p. 334.
- 26) PJP, p. 334.
- 27) JP, p. 48.
- 28) PJP, p. 335.
- 29) AJ, p. 49.
- 30) PJP, p. 335.
- 31) PJP, p. 335.
- 32) PJP, p. 335.
- 33) AJ, p. 55.
- 34) PJP, p. 335.
- 35) PJP, p. 335.
- 36) AJ, p. 57.
- 37) PJP, p. 335.
- 38) PJP, p. 335.
- 39) AJ, p. 57.
- 40) PJP, p. 335.
- 41) PJP, p. 336.
- 42) PJP, p. 336.
- 43) AJ, p. 90.
- 44) AJ, p. 90.
- 45) PJP, p. 336.
- 46) PJP, p. 336.
- 47) AJ, p. 99.
- 48) PJP, p. 336.
- 49) ロニーの著書では、「彼女 (= 詠み手) は、月が彼女にとって恋人の姿を映す鏡であってほしいという願いを表明している (Elle (= l'auteur) exprime le voeu que la lune soit pour elle un miroir sur lequel puisse apparaître l'image de son amant)」と説明されている。「日本の詩瞥見」の記述と相同性がある

のは明白である。AJ, p. 100 を参照のこと。

- 50) PJP, pp. 336-337.
- 51) AJ, pp. 37-38.
- 52) PJP, p. 337.
- 53) AJ, p. 33.
- 54) PJP, p. 337.
- 55) AJ, p. 110.
- 56) PJP, p. 337.
- 57) AJ, p. 111.
- 58) PJP, p. 338.
- 59) PJP, p. 339.
- 60) AJ, p. xij.
- 61) AJ, p. xv.
- 62) PJP, p. 339.
- 63) PJP, p. 339.
- 64) ハーンとギリギリスについては、拙論「ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』仏訳版の書き込みについて—昆虫譚と幽霊妻をめぐって—」『富山大学人文学部紀要』第 66 号, 2017 年, pp.175-189 を参照のこと。

本研究は科研費（JP16K13215）の助成を受けたものである。

